

被既読無視場面に対する ネガティブ感情の変化と アタッチメントスタイル

矢羽々紗枝*・堀内 聡*

片岡 祥**

Negative Emotional Reactions to a “Left on Read” Situation and Attachment Styles

Sae YAHABA*, Satoshi HORIUCHI*
and Sho KATAOKA**

This study investigated the negative emotional reactions to a “left on read” situation in various attachment styles. Two-hundred-seventy-nine Japanese high school students received a questionnaire designed to measure their attachment style. Participants read the scenario of not receiving a reply to a LINE message they sent to a close friend inviting them to play. Their negative emotions were scored, and data from 155 students were analyzed. Compared to students with a secure attachment style, those with a preoccupied style showed stronger feelings of fear and sadness. Scores of anger, disgust, energetic arousal, and tension arousal did not differ in attachment style.

key words: “left on read” situation, negative emotion, attachment style

問題と目的

既読無視とは、インスタントメッセージのLINEにおいて、メッセージを読んだものの、返信をしない状況のことである。既読無視されること（以下、被既読無視とする）は、他者からの非受容を連想させる。特に親密な関係の中での被既読無視はネガティブ感情を生起させやすいと考えられる一方で、ネガティブ感情を経験しない人がいる（田附他, 2019）と言う指摘もある。しかし、この個人差をもたらす要因に関しては十分な検討が進められていない。

本研究では、その要因の1つとして、アタッチメントスタイル（attachment style: AS）に着目する。青年期以降のASは自己および他者モデルのポジティブ/ネガティブさの組み合わせによって、安定型、拒絶型、とらわれ型、および恐れ型に分類される（Bartholomew & Horowitz, 1991）。そして自己モデルのネガティブさは見捨てられ不安（Collins & Feeney, 2004）、他者モデルのネガティブさは親密な関係に対する回避を特徴とする（Bartholomew & Horowitz, 1991）。安定型は、見捨てられ不安と親密さの回避が低い。拒絶型は、見捨てられ不安が低く、親密さの回避が高い。とらわれ型は、見捨てられ不安が高く、親密な関係に対する回避が低い。恐れ型は、見捨てられ不安と親密さの回避が高い。

本研究ではとらわれ型は他の3つの型と比較して、親密な関係の中で生じる被既読無視場面におけるネガティブ感情が顕著であると予想する（仮説）。なぜなら、とらわれ型の人とは他者と親密な関係性を希求する一方で、見捨てられ不安が強いため他者から拒絶されることへの懸念が強い（Collins & Feeney, 2004）ためである。一方、他の3つの型は、他者との親密な関係を求めない（親密性回避の高さ）か、他者からの拒絶を恐れない（見捨てられ不安の低さ）のいずれかの特徴をもつため、とらわれ型よりもネガティブ感情が生じにくいと予想する。ただし、一口にネガティブ感情と言っても怒りや悲しみ不安など多様な感情がある。各感情の生起の仕方を個別に予測するための根拠はないため、本研究では感情ごとに探索的に検討する。

なお、被既読無視場面におけるネガティブ感情の生起に影響する要因は他にもありえる。特にASを取り上げたのは、本研究が親密な対人関係における既読無視を扱うためである。青年期のASは親密な対人関係における心理的な反応の個人差を説明する（Bartholomew & Horowitz, 1991）。そのため、対人関係一般に共通する要因に比べて、ASの方がそのような場面のネガティブ感情の個人差に強く関連すると考えた。

方 法

参加者と手続き 参加者は地方公立高等学校に在籍する高校3年生279名であった。調査はホームルームの時間に行った。本研究は研究倫理委員会の承諾は得ていない。しかし、調査を実施した高等学校の担当者とは十分な協議を行い、調査前に参加者と保護者に十分説明を行った。調査実施の一週間前に、保護者あての説明文書を配布した。説明文書には、調査の概要、目的、回答の内容や回答の拒否によって不利益が生じないこと、成績には関係ないこと、参加は任意であること、結果は学会等で公表すること、保護者が調査への協力を望まない場合には、生徒に対して研究に参加しないように伝えることができること、を明記した。参加者に対しても、同様の説明を書面にて行った。また、質問紙の最後に同意欄を設けて意思確認を行った。さらに、データの利用を撤回できる旨を参加者に伝えた。

¹⁾ 本論文は、第一著者の令和元年度岩手県立大学社会福祉学部卒業論文、日本健康心理学会第33回大会で行ったポスター発表の内容を加筆・修正したものである。

* 岩手県立大学社会福祉学部
Faculty of Social Welfare, Iwate Prefectural University,
152-52 Sugo, Takizawa-shi, Iwate 020-0693, Japan.

** 滋賀文教短期大学子ども学科

Department of Childhood Studies, Shiga Bunkyo Junior College, 335 Tamura-cho, Nagahama-shi, Shiga, 526-0829, Japan.

Table 1 各アタッチメントスタイルにおけるネガティブ感情の平均得点および標準偏差

	安定型 (n=49)	拒絶型 (n=14)	とらわれ型 (n=64)	恐れ型 (n=28)
恐怖	0.36 ± 0.42 ^a (0.17-0.54)	0.50 ± 0.57 (0.16-0.84)	0.72 ± 0.72 ^a (0.56-0.88)	0.70 ± 0.82 (0.45-0.94)
怒り	0.35 ± 0.65 (0.13-0.57)	0.61 ± 0.85 (0.20-1.02)	0.45 ± 0.77 (0.25-0.64)	0.42 ± 0.94 (0.13-0.71)
悲しみ	0.48 ± 0.60 ^b (0.28-0.69)	0.64 ± 0.67 (0.26-1.03)	0.89 ± 0.79 ^b (0.71-1.07)	0.63 ± 0.81 (0.36-0.91)
嫌悪	0.54 ± 0.72 (0.34-0.75)	0.41 ± 0.63 (0.03-0.80)	0.65 ± 0.70 (0.47-0.83)	0.54 ± 0.84 (0.26-0.81)
エネルギー覚醒マイナス	0.22 ± 0.42 (0.06-0.39)	0.43 ± 0.67 (0.13-0.73)	0.28 ± 0.61 (0.13-0.42)	0.24 ± 0.68 (0.02-0.45)
緊張覚醒プラス	0.73 ± 0.60 (0.52-0.95)	0.79 ± 0.67 (0.39-1.19)	0.96 ± 0.86 (0.78-1.15)	0.86 ± 0.80 (0.57-1.14)

注) アルファベットは有意差を示す。点数の後の () の中には 95% 信頼区間を示す。

被既読無視場面 親友に対して LINE 上で「ねえねえ！今度の日曜日、一緒に遊ばない？」という問いかけをしたが、既読が付いたまま 1 日が経過した場面を提示した。

調査内容 (1) 被既読無視場面の自覚 提示した場面に対して、既読無視をされたと感じたか否かを尋ねた。(2) **感情・覚醒チェックリスト** (織田・高野・阿部・菊地, 2015) 被既読無視場面に対して生じた恐怖、怒り、悲しみ、嫌悪、エネルギー覚醒マイナス (例：無気力な)、および緊張覚醒プラス (例：緊張した) を測定した。得点範囲は 0 点から 3 点であり、得点が高いほど、喚起された感情が強い。(3) **関係尺度日本語版** (加藤, 1998) 一般他者に対する AS にあてはまるものを 4 つの中から選択してもらった。なお、見捨てられ不安と親密な関係の高低の組み合わせで AS を分類する方法もある。しかし、標準化された尺度がないため、参加者のこれらの傾向の高低を判断することが難しい。そのため、今回は本尺度を用いた。

結 果

同意が得られた 260 名のうち、「既読無視をされた」と判断した 155 名を分析対象とした (うち女性 88 名, 17.7 ± 0.48 歳)。各 AS における 6 つの感情得点を Table 1 に示す。AS を独立変数、6 つの感情を従属変数とする多変量分散分析の結果、有意な主効果が得られた (Wilks' $\Lambda = .80$, $F(18, 413.44) = 1.91$, $p = .01$)。フォローアップの分散分析の結果、従属変数が恐怖 ($F(3, 151) = 3.30$, $p = .02$, $\eta^2_p = .06$) と悲しみ ($F(3, 151) = 2.99$, $p = .03$, $\eta^2_p = .06$) の場合に有意な主効果が得られた。Tukey 法による多重比較の結果、安定型と比較して、とらわれ型は恐怖 ($p = .02$) と悲しみが顕著だった ($p = .03$)。その他の組み合わせでは、有意差が認められなかった。他方で、怒り ($F(3, 151) = 0.44$, $p = .73$, $\eta^2_p = .01$)、嫌悪 ($F(3, 151) = 0.54$, $p = .66$, $\eta^2_p = .01$)、エネルギー覚醒マイナス ($F(3, 151) = 0.49$, $p = .69$, $\eta^2_p = .01$)、および緊張覚醒プラス ($F(3, 151) = 0.88$, $p = .45$, $\eta^2_p = .02$) が従属変数の場合は有意な主効果が得られなかった。

考 察

本研究の結果、親密な関係における被既読無視場面において、とらわれ型は恐怖および悲しみにおいてのみ、安定型よりも有意に平均値が高かった。しかし、拒絶型および恐れ型

との間にはいずれの感情においても有意な差が認められなかった。よって、本研究の仮説は支持されなかった。

仮説が支持されなかった理由として主に 2 点のことが考えられる。まず拒絶型の参加者は $n = 14$ と少なく、差を検出するのに必要なサンプルサイズを満たしていなかった可能性がある。第 2 に「親友を遊びに誘う」という場面設定が拒絶型や恐れ型にとって不自然であった可能性がある。いずれの型も親密さの回避が高いため、自ら誘うという状況に対してネガティブ感情が高まった可能性が考えられる。

他方、恐怖および悲しみ感情において安定型ととらわれ型の間で有意差があることを示した点には意義があると考えられる。この 2 つの感情は被既読無視場面における AS の違いを反映しやすい感情である可能性が高い。今後は上記課題点を考慮しながら、被既読無視場面におけるネガティブ感情生起の個人差要因のさらなる検討を進める必要がある。この際、恐怖と悲しみに焦点を当て理論的裏付けを検証する必要性があることを本研究は示唆した。

引用文献

- Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. (1991). Attachment styles among young adults: a test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, *61*, 226-244.
- Collins, N. L., & Feeney, B. C. (2004). Working models of attachment shape perceptions of social support: Evidence from experimental and observational studies. *Journal of Personality and Social Psychology*, *87*, 363-383.
- 加藤和生 (1998). Bartholomew らの 4 分類愛着スタイル尺度 (RQ) の日本語版の作成 認知・体験過程研究, *7*, 41-50.
- 織田弥生・高野ルリ子・阿部恒之・菊地賢一 (2015). 感情・覚醒チェックリストの作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究, *85*, 579-589.
- 田附紘平・松波美里・木村大樹・鈴木優佳・橋本真友里・柴田彩花…桑原知子 (2019). LINE の既読をめぐる葛藤場面における青年の心理の特徴 年齢と性別の観点から心理臨床学研究, *37*, 16-27.